

# 中国農村高齢女性の老後における制度的困難と 日常生活のリアリティ:

江西省における質的調査を通じて

WU Yan

本研究は、中国江西省農村部に居住する配偶者不在の高齢女性を対象として、制度的支援が十分に行き届かない状況のもとで、彼女たちがどのように老後生活を営み、いかなる資源を活用しながら日常生活を維持しているのかを明らかにすることを目的とする。中国農村部では、高齢化の進行と若年層の域外流出が重なり、高齢者の生活基盤は不安定化しやすい状況にある。とりわけ、配偶者を持たない高齢女性は、低年金、慢性的な健康問題、家族支援の不確実性といった複数の困難を同時に抱えやすいにもかかわらず、既存研究においては制度分析や家族扶養構造の把握に重点が置かれ、当事者の日常生活における具体的な実践や、制度外で編成される支援資源のあり方については十分に検討されてこなかった。

本研究では、この課題を踏まえ、高齢女性の老後生活を単なる「制度的支援不足の結果」として捉えるのではなく、制度的制約のもとで、当事者がどのように生活を調整し、利用可能な資源を選択・組み合わせながら日常生活を維持しているのかという過程に着目する。その分析枠組みとして、ウォルマンの資源論を採用し、資源を「構造的資源」と「編成的資源」に区分して捉えた。構造的資源とは、年金制度や医療保障など制度的に提供される資源を指し、編成的資源とは、制度的制約のもとで、当事者が生活のなかで資源を意味づけ、選択し、関係づけながら利用していく過程そのものに着目する概念である。

調査は、江西省 A 県の一農村地域に居住する配偶者不在の高齢女性 6 名を対象に、半構造化インタビューを用いて実施した。調査対象者の選定にあたっては、村幹部を介した紹介とスノーボール・サンプリングを併用し、生活史や日常生活の実態を詳細に聞き取った。分析においては、生活史の語りを手がかりに、老年期に至るまでの労働経験、家族関係、教育経験、健康状態の変化といった要素を時系列的に整理し、老年期の生活困難がどのように形成されてきたのかを検討した。

第3章では、まず農村高齢女性が直面する脆弱性の構造を明らかにした。分析の結果、対象者の生活不安定性は、低水準の年金収入、子ども世代の不安定就労に伴う家族支援の限界、慢性的な健康問題と医療費負担といった複数の要因が相互に関連することで形成されていることが示された。これらの脆弱性は老年期に突発的に生じたものではなく、若年期からの労働経験や生活条件の累積のなかで形成され、制度的資源と十分に接続されないまま老年期に表出している点に特徴がある。

さらに、本研究は、こうした脆弱性の背景として、調査対象者が成長過程において経験してきたジェンダー規範と教育機会の制約に着目した。農村社会において重男軽女の価値観や性別役割分業が強く作用するなかで、女性は早期に教育機会から排除され、家事、農作業、育児、介護といった役割を担う存在として位置づけられてきた。その結果、生活の選択肢を主体的に検討する経験が乏しいまま成人期へ移行し、「家族のために担う側である」という自己認識(アイデンティティ)が形成されていった。このような固定化されたライフコースとライフチャンスは、老年期における生活判断や支援資源の選択にも影響を及ぼしている。

第3章後半および第4章では、こうした構造的制約を前提としつつ、高齢女性がどのように日常生活を維持しているのかを、支援資源の編成過程として分析した。分析からは、対象者が身体機能の低下や経済的制約を抱えながらも、生活を受動的に受け入れているのではなく、生活ペースの調整、支出の最小化、自給的生活技術の活用、家族関係や地域関係の選択的な維持といった実践を通じて、生活を成り立たせていることが明らかになった。

家族支援については、文化的には「息子中心」の扶養規範が存在する一方で、実際の支援は子ども世代の経済状況や世帯関係、嫁との関係に強く左右され、不均衡かつ不安定に編成されていることが示された。また、家族支援が十分に機能しない場面においては、近隣住民や親戚、友人といった地域社会の非公式な支援が、送迎や見守り、情緒的交流といった形で生活を部分的に補完していた。これらの地域支援は制度的に保障されたものではないが、高齢女性の生活を支える重要な資源として機能している。

以上の分析から、本研究は、中国農村部における配偶者不在の高齢女性の老後生活を、制度的欠如の結果としてではなく、制度的制約のもとで資源を意味づけ、選択し、編み合わせながら維持される生活の過程として捉え直した点に意義を有する。編成的資源は、生活の持続可能性を支える重要な要素である一方、構造的資源の不足が続く限り、当事者に過度な負担を集中させるという限界も併せ持つ。本研究の知見は、農村高齢者政策や支援実践において、高齢者を受動的な支援対象としてではなく、生活を構築する主体として捉える視角の重要性を示唆するとともに、制度的支援と地域社会の非公式支援をどのように補完的に位置づけるべきかについての示唆を提供するものである。